

## 優秀賞

力になりたい

越前市南越中学校 3年  
高島 凜花

「うわっ、あの子汚い水を飲んでる！」

小学四年生だった私は、教科書に掲載されていた写真を見て衝撃を受けた。先生から世界には学校にも行けず、家族のための毎日何時間もかけて水を汲みに行く子どもたちがいると教わり、とても驚いた。そして苦勞して汲んだ水を飲んで死んでしまう子どももいると聞き、とても悲しい気持ちになった。

そこで私は、その夏の自由研究で「水の浄化」について研究した。汚い水をきれいにできれば、死んでしまう子どもたちを救うことができると思ったからだ。石や砂、活性炭を使って水を何とか透明にすることが出来たが、それでもろ過しただけでは水に含まれた細菌まで除去することが出来ず、沸騰して熱処理をしても、結局飲み水を作ることはできなかった。その実験以降、どうしたら発展途上国や後進国の子どもたちを助けることが出来るだろうと考え続けている。

私の願いは、世の中から「発展途上国」や「後進国」という言葉が無くなることだ。この言葉がなくなったその先には、平和や協調の世界が広がっていると信じているからだ。そのためにはまず何がいちばん大事なことかと考えたときに、それは「安心」と「安全」だと思った。つまり命の保証が最優先だ。多くの子どもたちは、汚れた水に潜む細菌で病気に感染し、最悪死に至る。安心して水が飲めない生活など想像できるだろうか。命を落とすかもしれないとわかっているにもかかわらず、それでも生きるためにその水を飲まなければならないというのは、あまりにも残酷だと思った。

私は小学六年生のときに、児童会長として校内でエコキャップ運動を実施した。ペットボトルのキャップを集めてリサイクル資源として売却し、その収益で発展途上国の子どもたちのためにワクチンを購入するという取り組みだ。私はこの取り組みで、自分の行動を少し変えることで、誰かの力になれるということを実感した。そして安全な水を取り出すことはできなかったが、違う形で彼らの安全や安心を応援出来たことがとても嬉しかった。きっとまだ他にできることはあるはずだ。

私たちは修学旅行でユニセフハウスを訪問し、世界には水問題だけでなく、さまざまな苦境に立たされている子どもたちが大勢いることを知った。「子どもの権利条約」のことは知らなかったが、これが定められたということは、さまざまな権利が今もなお侵されている現実があるということだと悟った。

発展途上国で井戸を掘ることはできないが、世界で起こっている問題を学校で話し合おうとみんなに提案することは、私にもできると思った。まずは世界で起こっている問題を知ってもらい、関心を持ってもらいたいと思った。そこで私は生徒会活動を通じて、全校生徒に伝えることにした。何かできることはないかと考えることが、自分の行動を変える一歩だと思う。その小さな一歩は、きっと彼らの力になるはずだと私は信じたい。